

# 素 顔 拝 見



事務部長

船 木 正 宣

前任の、弘前大学から4月1日付けで、歯学部及び歯学部附属病院の事務を職掌することで配置換えを命じられました。

旧満州国四平省西安県西安街の生まれで、越後の小国三万石の城下町、村松町で育ちました。

13年6カ月余過ごした新潟大学を振り出しに病院創設に参画するため山形大学に転出し、その後、異動官職として東西の各地に転在し、24年6カ月ぶりに新潟大学に戻ることとなりました。自身にとっては正に凶らずもです。そもそも新潟は、郷里でもあるので、並の帰心はありましたが、在職中に果たされることはないと思っていましたので、凶らずもと表した理由はそこにあります。

最初に異動官職として、2年6カ月を経てからオホーツク海に面した碧空の大地に居住したときに、その風景の美しさに感嘆したものでした。その後、数年と数箇所を経て、再び北海道に居ることになったときには、予てからの北の大地に対する強い思いが、その地に終の住処を得ることを決めるのに然して時間は掛かりませんでした。それからは、自宅管理を口実にする配偶者を置いて単身で赴任し、今日に至っています。

それだけに、郷里に戻ることに、複雑な思いが交差しました。私の心的状態と周囲の様子とは別に、郷里の老母だけは、喜んでくれてるのには、萎える気持ちが、幾分救われています。

それにしても、自分の本意に逆らわずに、覇気のある学部と病院の大きな目的達成のため、知力を気力、体力で補って職務に専心したいと思います。

メーク無しの素っぴんの私は、正しく無芸大食

ですが、永続していることの一つは、早朝のランニングです。

最初に北海道に異動したときに周囲の環境から極端にラウンド数が多くなりオフィシャルの大会にも参加するなど集中しましたが、その後、本州に異動してからは、周囲の環境も変わりラウンド数も無に等しく激減したため、ウェートの激増を防ぐため、安直な考えで、ランニングを思いつき、一日10キロを課し、一カ月25日を走って一年で3,000キロ（おおよそ稚内から鹿児島までの距離）を目途に始めました。程なくフルマラソンで3時間20分台で完走できたのに、すっかり気を良くして、幾つかの各地の大会に参加しました。青梅マラソンから大会は、ここ数年遠ざかっていましたが、帰郷を期して新潟ロードレースと愛宕山クロスカントリーに参加しましたが、完走以外に大きな収穫を得ることはできませんでした。

早朝ランニングは、意地と惰性で今日まで続けています。着任してからのランニングコースは、関屋分水路に架かる掘割橋の宿舎から信濃川河畔を万代橋のたもとまでの往復と宿舎から西海岸沿いの窪田町までの、往復の12、3キロを設定し、時季によってコースを選択し、日課として強いています。

＊



特殊歯科総合治療部 講師

大 島 邦 子

本年4月より、特殊歯科総合治療部の障害者歯科部門を担当させていただいております。

素顔拝見のコーナーといえば、日頃、ライター

や先輩としてお世話になっている先生方の「す」の部分をかいま見られる、とても楽しみな読み物で、歯学部ニュースの中でも真っ先に読む大好きコーナーなのですが、そこに自分の写真が載るとなると、考えただけでも恥ずかしくて、もう2度と歯学部ニュースは読まないぞとってしまったほどの、小心者のうさぎ年、山羊座生まれです。こういう風には書くと、すぐ「うそつき」と言われますが、私の「す」は小心者です。決して学生さんや夫をいじめたりしません。「男らしい女医さん」というのも誤解です。

新潟生まれの新潟育ち、本学17回生です。海の近くで30年(ちょっと…ネ)生きて来ましたので、私の中で新潟とは、雪の新潟より、夏のあっちゃ新潟です。幼い頃、海水浴場で迷子になったことがトラウマとなり、水着に着替えると一瞬何とも寂しい気分になる(最近の水着になると情けない気分になる)のですが、ふーっと息を吸い込んで、「せーの」とサンダルを脱ぎ捨て、長い長い砂浜(あの頃は本当に広い砂浜だった)をアッチアッチと飛び跳ねながら海に突入して行く時の爽快感は、夏の新潟の醍醐味でした。泳ぎ疲れたら(と言ってもあまり泳げない。スキーと同じで休んでいる方が長い)、砂浜で、塩だか砂だか妙にシャリ感のある西瓜を食べる。そのまま帰ると、当然部屋中砂だらけ。部屋の中から砂が消える頃には、脱皮。砂・皮・砂・皮…の小学生時代。砂浜で夕日を見ながら、毎日、友達と話し込んだ中学・高校生時代。いつも海に見守られて歩んできた気がします。新潟は観光アピールが下手だと言われ、確かにこの海も重要な観光資源だとは思いますが、苗場や岩原のような、都会の香りのする青山海岸より、私はやっぱり関屋浜や日和山の田舎臭さが大好きです。

話が脱線しましたが、現在、私的には夫一人と子供が二人います。息子は私に似て温厚なのですが、私に似ず声のでかい娘が仕掛けるバトルに引きずり込まれる毎日で、閑静な住宅街で不評を買う一家となっています。静かな時間が欲しいと思うこの頃ですが、いつか、息子が娘と一緒に、ふつうの映画(ポケモンやおじゃ魔女でなく)をみて、喫茶店でコーヒーでも飲みながら静かに語り

合いたいというのが、目下の夢です。

最後に真面目な話を少し。本学卒後に研修医第1期生として小児歯科学講座に入局しました。「小児歯科医は子供を持って一人前」という野田教授の教を全うし、2度の産休の間も医局の方々に助けていただき、また多くの先輩方にご指導いただいて、小児歯科の臨床に携わって参りました。口腔解剖学第2講座の前田教授のご指導によって、神経終末の発達に関する学位論文を仕上げることができたのも、小児歯科医としての基礎を築くことができたと思っています。現在は、まだ特殊歯科に移籍したばかりで、バタバタと小児歯科と特殊歯科を行ったり来たりしながら、障害者歯科に関して毎日勉強させていただいています。小児歯科に籍を置いていた時から障害者の治療には携わって参りましたが、症例を重ねるごとに、まだまだ奥が深く、研鑽せねばと思う毎日です。また、障害児を支える保護者の方々のよき相談相手となれるよう、人間的にも成長していきたいと思っています。

まだシステマ的なこともよく分からず、他科の先生方や事務の方々、学外の先生方にもご迷惑をお掛けすることがあるかもしれませんが、日々精進して参りますので、宜しくご指導の程、お願い致します。

\*



小児歯科学講座 講師

田邊 義浩

#### 1. こだわり

小児歯科に入局して以来、障害児者とくに自閉症患者の歯科治療について考えてきました。自閉症は脳の機能障害が強く推察される行動的症候群と考えられていますが、「自閉症」という名前が一人歩きをして、内向的性格や引っ込み思案と思われがちで、その障害が正しく認識されていません。自閉症患者の歯科治療については、治療に適応で

きない患者をいかに効率よくコントロールして歯科治療を行うかという観点から研究されていて、そもそも自閉症患者が本当に歯科治療に適応できないのか、という点はあまり問題にされていませんでした。自閉症患者の歯科治療時の取り扱いに、療育の場で取り入れられている TEACCH system などを応用して環境を整えれば、重度の自閉症患者でも、歯科治療に対して適応するということを発表したのが入局して9年目でした。障害者にとっても口腔ケアは一生の問題です。たとえ何年かかったとしても保護者が元気なうちにブラッシングと一般的な歯科治療に慣れることができると、施設などに入所した後も毎日のブラッシングや定期診査が確実に行えて、良好な口腔内を保つことができると考えています。

日本において障害者は養護学校、入所施設等に集められ社会的に隔離されていく傾向にあります。しかし、歯科に関しては一般開業医の増加や歯科医師会のご努力によって、障害者が「町の歯医者さん」で治療を受けることができる環境が整ってきているように感じます。歯科医師のちょっとした配慮で障害を持つ患者であっても普通に歯科治療を受けることできる可能性があることを、これから歯科医師を目指す学生の方に知っていただきたいというのが、現在のこだわりです。

## 2. 仕事

いつまでもネチネチやっているの、「しつこい性格」と言われます。現在自分の中で持ち続けている臨床上のテーマの多くは、入局して2、3年目までに疑問を感じたものです。たとえば、治療中大泣きをしている子供が、ある時何事もないように治療を受けることができるようになるのはどのような心理的变化に因るのか、普通に治療を受けていた子供が突然治療を怖がるようになるのは予測できないのか、幼児期の歯科治療経験が青年期以降の歯科に対するイメージに影響を及ぼすか、乳歯列期反対咬合児が永久歯列に交換した後の咬合状態を早期に予測することが難しい原因は何か、などです。どれも子供の成長が関係しているため気の長い仕事です。なかなか結果が出ませんが、私としてはこれからの歯科臨床に貢献すると信じて、周囲の状況が許す限り臨床経験を重

ね、子供たちの成長を見守りながら自分なりの答えを出していきたいと思っています。

## 3. 趣味

これといった趣味は無いのですが、余暇のほとんどはコンピュータの組み立て・パーツ交換とプログラム作製に費やしています。これもしつこきとこだわりかもしれませんが、高校生のときコンピュータに触れて以来、20年間縁が切れません。学生時代はプログラムするネタがなかったのでゲームを作っていました。マイクロソフトのおかげ？でワープロや計算表を Windows 上で使うようになってからは、プログラム環境も Windows になってしまいました。Visual BASIC と C++、Delphi どれも仕事のプログラムには便利でしたが、これでゲームを作ろうという気持ちは起こらなくなりました。これは年をとったせいかもしれませんが、これまで20近いプログラム言語を試みて、やはり MS-DOS 時代の N88-BASIC+マシ語や Turbo C が一番楽しかったように思います。速いと評判のライブラリーを手に入れたときは本当にわくわくしました。それと NEC の PC9801 のプログラムには、それ自体にアドベンチャーゲームのような感覚がありました(情報が不確実でなかなかうまくいかなかった、ともいえます)。

最近使っている Visual studio6.0 は非常に多機能で便利ですが、あまり奥が深くいちいちヘルプを参照しなければ素人には使いこなせません。また MFC の時点で消化不良を起こしている私の灰色の脳細胞が、Java や .net といった次世代についていけるかどうか、危うくなってきたのも悲しいことです。とりあえず、これまでにセファロ分析、256階調白黒レントゲン写真画像のカラー処理、X線テレビ画像の分析、音声分析、動画情報の検索などに関するソフトを作っています。誰か使って下さい、もちろんフリーソフトです。

## 4. その他

料理は作るのも食べるのも大好きです。子供が生まれてからは、子供が食べないことを理由に、家庭でほとんど料理を作らせてもらえません。そのため最近腕が落ちて、医局で料理を作っても若手の作品にかなわなくなりました。

父が亡くなってから家の庭を維持しています

が、どうも近年はやりのガーデニングとは異質の作業です。定年後の暇に任せて育てた庭木や鉢植えを私が維持できるはずもなく、年々荒れていきます。特に夏場の毛虫の襲撃はすさまじく、気が付くと2, 3本丸坊主になっています。無理な話ですが、毎日世話してやらないといけないでしょう。

健康維持のためスイミングクラブで泳ぐ決意をしたのですが、情けないことに泳げるような健康状態にないことが多く、まずは泳ぐための健康づくりを考えなければなりません。

＊



歯科補綴学第二講座 講師

橋本明彦

今原稿を書いている8月。今年の夏は特に暑いなど実感しますが、私が新潟に来た15年前の夏も連続真夏日を更新するほどの暑い日が続いたことをよく覚えています。私は東京都台東区に生まれ、5歳までを東京で、6歳から18歳までを埼玉で過ごしました。未だに本籍は東京都台東区のままですが「出身は？」と聞かれると迷うことなく「埼玉です。」と答えます。埼玉県人というのはどこか埼玉出身と言うことにコンプレックスを持っているのではないかと思います（偏見でごめんなさい）。私もその一人ですが、既に新潟に在住している期間が一番長くなってしまいました。

ところでコンプレックスといえば、私は長い間「歯医者」という仕事にコンプレックスを持っていました。小学生の頃、教頭先生がよせばいいのに特別授業なるものをしてくれました。当時「悪魔の辞典」なる書籍が出版されており、何気なく読むには風刺の効いた面白い本でした。しかし、教頭先生はあろう事かその本の「歯医者：人の歯を削ってポケットからお金を巻き上げる魔術師」の項が載っているページを教材として引用したのです。子供ながらに歯医者とはろくな職業では

ないと思ったものでした。

しかし、そう思いつつ歯学部に入學してしまうのもどうかと言う感じですが、卓球部、スキー部、医学部軟式テニス部と三つ掛け持ちしてよく体を動かしていました。特に一年の時は全学卓球部にも出ましたし、黎明祭の時には全学卓球部Aチームとして駅伝大会にも参加しました。私自身打たれ強い一方で融通が利かないと思っていますが、これはこのときに培われたのでしょうか。しかしそれにしても卓球はあまりうまくならなかった（笑）。他に囲碁や硬式テニスもう長い間やっています。いずれも出だしはセンスの良さを褒められますが長いキャリアの割にはあまり上達しません。囲碁に至っては20年前には初段の免状をもらっていたのに未だにほとんど変わっていないことを基敵の先生方に突っ込まれています。このように体を動かし、たまに頭を使うのが今も私のストレス解消法となっています。

さて、現在私は第二補綴にお世話になっています。相も変わらず「歯医者」にコンプレックスを持っていた私は歯科医療とどうつき合っていくべきか日々の臨床にもまかれていました。ある日前任の折笠講師より「金属アレルギーの臨床について発表してみないか？」と声をかけていただきました。インプラントやレーザーなど派手なテーマが多い当講座のテーマの中で「金属アレルギー」という歯科医療のいわばネガティブな部分を担当して5年になります。金属アレルギーと一言で言っても皮膚科学、免疫学、腐食学など関わる分野は多岐にわたり未熟さを感じることもしばしばです。そんな私の意見も受け入れて育てていただいた故草刈教授には感謝の意に絶えません。

ここ数年、もっと自分と家族のために時間を割きたいと思うこともしばしばですが、思いもよらず助講会の中に加えていただき、新たなコンプレックスを抱えてしまった自分の至らなさを思うとなかなかそれもままなりません。今も、金属アレルギーに悩む患者さんからの問い合わせをメールで頂くことも少なくありませんが、私ができることを全うする事で新潟大学歯学部の一員として少しでもお役に立てればいいなと思っています。今後ともよろしく願いいたします。